

天国と地獄

天国は曩に述べた如く上位の三段階になっており、第一天国、第二天国、第三天国がそれである。第一天国は最高の神々が在しまし、世界経綸の為絶えず経綸され給うのである。第二天国は第一天国に於ける神々の補佐として、それぞれの役目を分担され給い、第三天国に至っては多数の神々が与へられたる任務を遂行すべく活動を続けつつあるが、勿論全世界凡ゆる方面に涉つての活動であるからその行動は千差万別である。第三天国の神々は中有界から向上し神格を得たのであるから人間に最も近似しており、エンゼル（天使）ともいわれるのである。

右は神界構成の概略であつて、神界は今日迄約三千年間、仏教の存在する期間は甚だ微々たる存在であつた。何となれば神々は殆んど仏と化現され、そうでないのは殆んど龍神となつて時を待つておられたのである。又神々は仏界を背景として救の業に励しみ給うたの

で其期間が夜の時代であつて昼の時代に轉換すると同時に神界は復活するといふ訳である。

次に、極樂淨土は仏語であつて仏界の中に形成されて居るが、極樂に於ける最高は神界に於ける第二天國に相応し、仏説による都卒天がそれである。其所に紫微宮があり、七堂伽藍があり、多宝塔が聳え立ち、百花爛漫として咲き乱れ、馥郁たる香氣漂い、迦陵頻伽は空に舞い、その中に大きな池があつて二六時中蓮の葉が泛んでおり、緑毛の亀は遊嬉し、その大きさは人間が二人乗れる位で、それに乗った靈の意欲のまま、自動的に何処へでも行けるのであつて、何ともいへぬたのしさだといふ事である。又大伽藍があつてその中に多数の仏教信者が居り、勿論皆剃髪で常に詩歌、管絃、舞踊、絵画、彫刻、書道、碁、将棋、等現界に於けると同様の娛樂に耽つており、時折説教があつて之が何よりのたのしみといふ事である。その説教者は各宗の開祖、例えば法然、親鸞、蓮如、伝教、空海、道元、達磨、日蓮等である。そうして右高僧等は時々紫微宮に上り、

釈尊に面会され深遠なる教法を受け種々の指示を与えらるるのである。紫微宮のある所は光明眩く、極樂浄土に救はれた霊と雖も仰ぎ見るに堪えないそうである。

極樂の下に浄土があつて、そこは阿弥陀如来が主宰されているが、常に釈迦如来と親しく交流し、仏界の経綸に就いて語り合うのである。又觀世音菩薩は紫微宮に大光明如来となつて主座を占められ、地上天国建設の爲釈迦阿弥陀の両如来補佐の下に、現在非常な活動をされ給いつつあるのである。然し乍ら救世の必要上最近迄菩薩に降り、阿弥陀如来に首座を譲り給うたのである。

そうして近き将来仏界の消滅と共に新しく形成さるる神界準備の爲、各如来、菩薩、諸天、尊者、大士、上人、龍神、白狐、天狗等々漸次神格に上らせ給いつつ活動を続け、頗る多忙を極められつつあるのが現状である。

次は地獄界であるが。之は天国とは凡そ反対で光と熱がなく下位に往く程暗黒無明の度を増すのである。地獄は昔から言はれる如く種々雑多な苦悩の世界で、私はその概略を解説してみよう。

先づ重なる種類を挙げれば針の山、血の池地獄、餓鬼道、畜生道、修羅道、色欲道、焦熱地獄、蛇地獄、蟻地獄、蜂室地獄等々である。

針の山は読んで字の如く無数の針が林立している山を越えるので、その痛苦は非常なものである。此罪は生前大きな土地や山林を独占し、他人に利用させない為である。

血の池地獄は流産や難産等出産に関する原因によって死んだ霊で、此種の霊を数多く私は救ったが、それは頗る簡単に祝詞を三回奉誦し、幽世の大神様に御願する事によって即時血の池から脱出し救はれるので、大いに喜ぶのである。血の池地獄の状態を靈に聞いてみると斯うである。その名の如く広々とした血の池に首の付根まで何年も漬っている。その池の水面ではない血の面に無数の蛆が浮いて

おり、その蛆が絶えず顔面に這上ってくる。払っても祓っても這上ってくるので、その苦しみは我慢が出来ないという事である。此原因は生前無信仰者にして、その心と行に悪の方が多かった為である。

餓鬼道はその名の如く飢餓状態で、常に食欲を満そうと焦燥している。それ故露店や店先に並んでいる食物の霊を食おうとするが、之は盗み食いになり、一種の罪を犯す事になるので止むなく人間に憑依したり、犬猫等に憑依し食欲を満そうとする。よく病人で驚く程食欲の旺盛なのがあるが、之は右に述べた如き餓鬼の霊が憑依したのである。又犬猫に憑依した霊は漸次畜生道に堕ちる。其場合人間の霊の方が段々融け込んでゆく。恰度良貨が悪貨に駆逐されるように、終に畜生の霊と同化してうのである。此意味に於いて昔から川施餓鬼などを行うが之は水死霊を供養する為で、水死霊は無縁が多いから供養者がなく、餓鬼道へ堕ちるので、餓鬼霊に食物を与へ有難い経文を聞かせるので大きな供養となるのである。

餓鬼道に墮ちる原因は自己のみが贅沢をし他の者の飢餓など顧慮しなかつた罪や、食物を粗末にした等が原因であるから、人間は一粒の米と雖も決して粗末にしてはならないのである。米という字は八十八とかくが、之は八十八回手数がかかるという意味で、それを考えれば決して粗末には出来ないのである。私も食後茶を呑む時茶碗の底に一粒も残さないように心掛けている。彼のキリスト教徒が食事の際合掌黙礼するが、之は実によい習慣である。勿論食物に感謝の意味で、人間は食物の恩恵を忘れてはならないのである。

畜生道は勿論人霊が畜生になるので、それは如何なる訳かというと生前その想念や行為が人間放れがし、畜生と同様の行為をするからである。例えば人を騙す職業即ち醜業婦の如きは狐となり、妾の如き怠惰にして美衣美食に耽り男子に媚び、安易の生活を送るから猫となり、人の秘密を嗅ぎ出し悪事の材料にする強請の如きものや、戦争に関するスパイ行為等、自己の利欲の為他人の秘密を嗅ぎ出す人間は犬になるのである。然し探偵の如き世の為に悪を防止する職

業の者は別である。そうして世の中には吝嗇一点張りで金を蓄める事のみ専念する人があるが、之は鼠になるのである。活動を厭い常にブラブラ遊んでゐる生活苦のない人などは牛や豚になるので、昔から子供が食後直ちに寝ると牛になると親が窘めるが、之は一理ある。又氣性が荒く乱暴者で人に恐れられる、ヤクザ、破落戸等の輩は虎や狼になる。唯温和しいだけで役に立たない者は兎となり、執着の強い者は蛇となり、自己の為のみに汗して働く者は馬となり、青年であつて活氣がなく老人の如く碌な活動もしない者は羊となり、奸智に長けた狡猾な奴は猿となり、情事を好み女でさえあれば矢鱈に手を付けたがる奴は鶏となり、向う見ずの猪突主義で反省のない者は猪となり、又横着で途呆けたがり人をくったような奴は狸や貉となるのである。

然し以上の如く一旦畜生道に堕ちても、修業の結果再生するのである。人間が畜生道に堕ち再び人間に生れ又畜生道に堕ちるというように繰返しつつある事を仏教では輪廻転生というがそれに就いて心

得なければならぬ事がある。例えば牛馬などが人間からみると非常な虐待を受けつつ働いているが、この苦行によって罪穢が払拭され、再生の喜びを得るのである。今一つ面白い事は牛馬は虐待される事に一種の快感を催すので、特に鞭で打たれたがるのである。右の如く人間と同様の眼で畜生を見るという事は実外的外れの事が多いのである。其他盜賊の防止をする番犬、鼠をとる猫、肉や乳や卵を提供する牛や羊、豚、鶏等も人間に対し重要な役目を果すのであるからそれによって罪穢は消滅するのである。

又面白い事には男女間の恋愛であるが、之は鳥獸の靈に大關係のある事で、普通純真な恋愛は鳥靈が頗る多く鶯や目白等の小鳥の類から鳥、鷺、家鴨、孔雀等に至るまで凡ゆる種類を網羅している。恋愛の場合、此鳥同志が恋愛に陥るのであるから、人間は鳥同志の恋愛の機関として利用されるに過ぎない訳であるから、此場合人間様も少々器量が下る訳である。又狐靈同志の恋愛も頗る多いが之は多くは邪恋である。狸もあるが之は恋愛より肉欲が主であつて世にい

う色魔などは此類である。又龍神の再生である龍女は精神的恋愛は好むが肉の方は淡泊で、寧ろ嫌忌する位で、不感症の多くはそれである。從而結婚を嫌い結婚の話に耳を傾けなかったり縁談が纏ろうとすると一方が病氣になったり、又は死に到る事さへあるが、之等は龍女の再生又は龍神の憑依せる為である。よく世間何々女史といひ、独身を通しつつ社会的名声を博す女傑型は龍女が多く、稀には天狗の靈もある。

以上の如く靈界の構成や靈界生活、各種の靈に就いて大体述べたつもりであるが、以下私の経験談をかいてみよう。